

二強くてサガ3

N E W S A G A

阿部正行
Abe Masayuki

目次

本編
7

番外編
創世歴二千八百二十七年二月
255

マイザー・レング・
ガルガン

ガルガン帝国の第三皇位継承者。
放蕩皇子として悪名高い。

美しきエルフの精霊使い。
カイルの村を訪れ、
なほ崩的に仲間になる。

ウルザ

セラ

カイルの幼馴染で、
女の子に目がない
ムードメーカー。

アンジェラ・イネス・
ガルガン

マイザーの末妹。力を尊ぶ帝国の
姫らしく、強者が大好き。

リーゼ

おきなしみ
カイルの幼馴染。格闘の才能が
あり、その腕前はかなりのもの。

ミナギ

暗殺をはじめとする
闇の技術を受け継ぐ
「シノビ」一族出身の美女。

カイル

主人公の魔法剣士。一度
魔王を倒したが、真紅の
宝石の力で過去に戻り、
再び冒険を始める。

シルドニア

マジックキング
伝説の「魔法王」が自分の人格や知識
の一部を複製した魔剣の精神体。

1

石造りの壁に囲まれた、狭い通路。窓も一切ないため薄暗く、重苦しい雰囲気漂う中を、カイルは歩いていった。

引き締まった表情でまっすぐ正面を見据えているが、内心大きくため息をつく。

(まったく、面倒なことになったな。だが、予定外とはいえ手を抜く訳にもいかないし……腹をくくるか)

そして、分厚い両開きの扉の前に立つ。

重い音を響かせながら扉が開くと、薄暗かった通路に強い光が差し込む。

視界が開けると同時に、それまでの静寂を吹き飛ばすかのような凄まじい歓声が耳に飛び込んできた。

ここは、近年成長著しいガルガン帝国の帝都ルオスにある、大陸最大級の闘技場。今カイルはその選手入場口にいた。七万人を収容する観客席は、見渡す限り人で埋め尽くされている。

ふと目を向けた対面には同じように入口がある。そこから一人の大男が出てきた。筋骨隆々の身体を見せつけるが如く、上半身は裸だ。腕などは成人女性の胴よりも太いし、体重はおそらくカイルの三倍以上はある。身体も顔も傷跡だらけで、髭面と相まって実に凶悪そうだ。

『皆様お待たせしました！ ただ今よりガルガン帝国建国記念、大武術祭本戦・第一試合が始まります！』

拡声の魔法を使っているのだろう、司会と思しき女性の澄んだ声が、闘技場全体に響き渡る。

『さあ、一回戦第一試合から注目の一戦となりました！ 西の門から出てきたのは、ジルグス王国出身のカイル選手。手元の資料によりますと、魔獣に襲われ危機に瀕したミレーナ女王を救うため、たった一人で大型ヒドラを討ち取ったという経歴の持ち主で、その功績により、ジルグス王国からの推薦を受けての出場です！』

ジルグス王国出身と紹介された瞬間、観客席からブーイングが響き渡る。ジルグスとガルガンはお互いに仮想敵国であり、数年前には戦争寸前とまでなったことを、国民の誰もが忘れてはいないのだ。

『対するは、この大闘技場所属の人気格闘家、荒くれのロッケルト！ 前回の大武術祭では準決勝まで残った現役剣闘士で、人気と実力を兼ね備えた優勝候補の一人です！』

今度は、カイルの時とは対照的な大歓声が響く。ロッケルトも狂暴そうな大声を上げ、両手を振

りかざして歓声に応えた。

剣闘士とは戦いを見世物にする者達の総称だが、全員が剣で戦うわけではない。それぞれが己にあった戦闘スタイルを持っており、他の武器で戦う者やロッケルトのような素手の格闘家も少なくない。

『この試合、公式賭け率は八対二でロッケルト選手が有利！ これは、ロッケルト選手がこれまでの戦績が評価された一方、カイル選手はガルガン帝国でほぼ無名というのが響いているようです！』
このアナウンスに、背中の剣に手をかけていたカイルの眉がピクリと動く。

『随分と過小評価されているな……仕方ない、やはり予定通りいくか』

『さあ試合開始です！』

簡潔な開始の合図と同時に、目の前の対戦相手に少しだけ同情の視線を向けたカイルは、剣の柄から手を離す。

「？ おい、どういうつもりだ？」

ロッケルトが怪訝な声を出す。

「いや、お前格闘家だろ？ それに合わせてやろうと思ってな」

そう言ってカイルは格闘の構えを取り、更に誘うように手招きする。

『おくつとカイル選手、剣を抜かない？ しかも何やら挑発をしているようだ！』
アナウンスの声が響いた途端、ロケットは怒りの唸り声を上げてカイルに襲い掛かった。
全力で放たれたであろうロケットの拳を、カイルはバックステップで避けた。

その後の連続攻撃も、カイルはある意味ゆっくりとした動きで後退しつつ、回避していく。どれも紙一重と言っているくらいの際どさだったが、余裕の表情と口調でカイルは挑発を重ねる。

『どうした？ そよ風しか当たっていないぞ』

「ええい、ちょこまかと！」

いらついた声と共に、当たりさえすればと更に繰り出されるロケットの攻撃を、カイルはひたすら回避し続ける。

『ロケット選手の猛攻！ カイル選手もギリギリで避け続けていますが、一方的な展開です！』
ある意味では膠着状態とも言える状況が続いたが、やがて遂に、カイルは壁際に立たされた。

「追い詰めたぞ……！！」

今度こそとばかりに、ロケットは渾身の力を込めて蹴りを放つ。

しかし、ここまで全力で攻撃を続けた彼の息は乱れ切っていた。

「疲れて動きが雑になっているぞ！」

対するカイルは最小限の動きしか取っていないため、余裕がある。

丸太のような足による蹴りが放たれる瞬間、カイルは一気に踏み込み、自分の間合いを手に入れた。これまでとは違うその鋭い直線的な動きがフェイントにもなり、ロケットの反応は遅れる。

「お前に恨みはないが、運が悪かったと諦めてくれ」

こんな言葉と共に、カイルは思いつき殴りつけた。顎を打ち抜き、衝撃で脳を揺らす一撃。これを見事に決められて白目をむいたロケットは、そのまま響きでも起こしそうな派手な倒れ方をした後、ぴくりとも動かなくなる。

「やっぱり効くな、この角度」

これは肝臓打ちと並ぶリーゼの得意技で、カイルが身をもって覚えた、人の意識を効果的に断つ攻撃だ。

一拍遅れて大歓声が響くと、カイルは片手を上げて応える。そして倒れたロケットには一瞥もくれずに、ゆっくりとした足取りで出てきた西の門へと向かった。

『ロケット選手立てない！ まさかのカイル選手の完勝！ 一撃必殺！ まさに瞬殺です！』

いや殺してないから、と心の中で突っ込みをいれながら、カイルは闘技場を後にした。

「お疲れ様！」

選手控室に戻ったカイルを、リーゼ、ウルザ、シルドニアの三人が迎える。

戦いの前は集中したいだろうと、これまでは気を使って観客席にいたが、勝利を収めたカイルを称えに来たのだ。

「それにしても優勝候補を一撃で倒すとは、見事だったぞ」

「うん、これなら問題なく優勝できそうだね」

ウルザとリーゼが口々に褒める。まるで自分のことのように嬉しそうだ。

シルドニアも何か言いたそうだったが、屋台で買った食べ物を口いっぱい頬張っているため、とりあえず偉そうに頷いている。

「いや簡単に言うな。かなりギリギリだったぞ」

盛り上がる女性陣をよそに、カイルは精神的な疲労を感じて大きくため息をついた。

実際ロツケルトは優勝候補に相応しい実力者だった。カイルがあっさりと勝てたように見えたのは、事前にロツケルトについて調べ、その戦闘スタイルを知っていたおかげだろう。

無類の打たれ強さを誇り、相手の攻撃に耐え続けて反撃するという彼の戦い方は、わかりやすい派手さがあった。そうした戦い方による身体中の傷そのものすらも商売道具となって、剣闘士としての人気を支えていたのだ。

観客のための魅せる戦い方を常とする以上、カイルが何か企んでいるとわかっていても、挑発に乗らざるを得ない。カイルもそれをわかっていたから、挑発し続けた。

攻撃は鋭かったし、当たれば大ダメージだったのは間違いない、カイルとて回避には非常に神経をすり減らした。だが、これまでのロツケルトの試合が全て短時間で決着がついていたことを掴んでいたカイルは、相手をスタミナ不足と睨み、大振りの全力攻撃をさせ続けた。これが功を奏し、一撃で倒せる急所攻撃が成功したのだった。

カイルには、未来で起こる魔族との大戦争までに発言力を得るため、名声や知名度を上げるという目的がある。そのためにはできるだけインパクトのある勝ち方をしたかったので、こんな危険な作戦を選んだのだ。負けることはなかったにしても、ともすれば、もっと長引いていた可能性もある。完勝に見えたかもしれないが、実際は薄氷を踏むような、ギリギリの勝利だった。

しかしそんなカイルの思いをよそに、リーゼ達は盛り上がっている。

「優勝まではあと何回勝てばいいんだ？」

「えっと、二回戦、三回戦、準決勝、決勝……あと四回勝てば優勝だよ！」

「むぐむぐ……なんだ、思ったより簡単ではないか。妾としてはもっと危機的状況になって、盛り上がってほしいものだがな」

ウルザ達三人の声は、カイルの優勝を微塵も疑っていない。

「そう上手くいくと良いんだがな」

優勝候補のロツケルトを圧倒したことで、これからの対戦相手が油断してくれることは期待でき

ない。それに試合を重ねれば重ねるほどこちらの手の内を見せることにもなり、研究されるだろう。何でこんな面倒なことになったんだ、とカイルはこの状況に陥った顛末を思い出し出していた。



アリニラ街道は、ロインダース大陸における人族領を東西に横切る大街道の一つで、常に多くの旅人や交易商人が行き交っている。

野盗や魔獣対策のために、こういった街道はできる限り大人数で移動するのが常識だが、東に向かうその一行は特に目を引いた。

中心には、ジルグス王国の紋章の入った大型馬車がある。その周りを警護する騎馬隊、貴人の世話を専門とした女官や従者達を乗せた小型馬車等、総勢二百人以上になる外交使節団だ。

馬車の造りは細部まで凝っており、騎士達はもちろん、馬までもが豪華絢爛な衣装を身につけていた。

国の代表として他国を訪れる外交使節は、見た目という最もわかりやすい形で国威を示す必要があるからである。ましてやこれから向かうのは、仮想敵国たるガルガン帝国。気合いも十二分に入っていた。

ただ、実はこれでも人数は相当少ない方だ。通常なら最低でもこの倍、時には千人以上を用意する場合もある。

また、国威の喧伝を兼ねて人目を引くようにゆっくりと進むべきところ、今回はかなりの速さで進んでいる。

これは今回の外交が通例的なものではなく、真に差し迫ったものであることを表していた。

(それでも俺達の旅の速さに比べれば半分以下だな……ま、楽なのは確かだが)

馬車に揺られて外の景色を見つつ、カイルはそんな風に考えていた。

中心の大型馬車に乗っているのは、カイルを含めたこの一団の責任者の三人だ。

カイルの対面には、ジルグス王国近衛騎士第五隊長にしてミレーナ王女の側近である武官キルレンが座っている。意匠を凝らした軍服が、彼女の凛とした美しさを際立たせている。

「カイル殿、またも急な要請、申し訳ない。このように請けていただいたことを本当に感謝しております」

キルレンがカイルに頭を下げる。

彼女はジルグス建国から続く名門貴族の出身にして、次期女王ミレーナの母方の従姉である。更に彼女の曾祖母は数代前の国王の妹だったため、傍系ながら王族の血も引いている。つまり家柄、血筋ともに文句なく国内最高の貴族と言える。そんな彼女が、王位を巡るミレーナ王女暗殺未遂事

件の時から面識があったとはいえ、一般人に過ぎないカイルに頭を下げるなど本来あり得ないことだ。

「いえ、お気になさらずに。ここまで関わっておきながら、まさか今さら投げ出す訳にもいきません。それに今回の外交の重要性はよく理解しています」

「そう言っていたら、私としても助かります。今回の会談の成果はカイル殿にかかっていますので」

カイルが慌てて返答すると、キルレンは真面目な顔で、知ってか知らずか、カイルに重圧をかけた。

今回のガルガン帝国への訪問は、鉦山都市カランで起きた魔族出現事件の後始末と言っている。カイル達が魔族を倒したにより直接の脅威はなくなったが、それで終わった訳ではない。

特に問題だったのが、帝国側の被害だ。

カランにある大使館の職員の半分が死亡し、帝国でも特別な存在である飛竜騎士団も壊滅。更には帝国の重鎮の一人とも言えるべき宮廷魔導士アルザードが死亡するなど、帝国側にとっても前代未聞の重大事件であった。

要するにこれらが全て魔族の仕業であり、ジルグスの敵対行為ではないと帝国側に証明するため、キルレンをミレーナ王女の名代とした外交使節団が帝国に向かうこととなったのだ。

当然のように、まだカランに滞在していたカイル達も、魔族を直接倒したという証言をするために引つ張り出されたという訳である。

カイルとしてはいいように使われているという気がしないでもないが、確かに一つ間違えれば国家間に大きな遺恨を残すだろうし、最悪、戦争の引き金にもなりかねない。そんな事態はカイルとて望むところではなかった。

また考えようによっては、自分ならば魔族と戦っても勝てるということ帝国側に売り込む好機とも言える。

そう考えたカイルは、この要請を請けた。

ただし、あくまで魔族を倒したことを証言する協力者であって、ジルグス王国に属す立場ではない、という条件をつけた。

これに難色を示す者もいたが、ミレーナ王女が快諾したため、カイル達は客人の立場である。いずれにせよ重要人物と見なされているのは間違いない、その証拠にカイルのみキルレンの馬車に乗ることになったのだ。

「なに、それほど気負う必要はありませんよ。最悪の結果になったとしても、戦争になってどちらかの国が滅ぶ程度です」

にこやかに話しかけてきたのはキルレンの隣に座っている、上品な髭を生やした五十歳前後の太りの男性。故レモナス王の側近であった、オーギス大臣だ。

「オーギス殿、国の大事を茶化すのは止めていただきたい」
多少不機嫌そうにキルレンが言う。

「おや、これは失礼をしました。あまり固くなつてはいけないと思ひまして。経験者からの助言のつもりだったので……」

オーギスは頭を下げるが、その顔は笑ったままだ。

「いえ、カイル殿だけでなく、キルレン様も少し緊張されているご様子でしたので」

この使節団の代表で全権を握っているのはキルレンだが、実際に取り仕切っているのはオーギスだった。

口を開きかけたキルレンを遮り、オーギスは続ける。

「キルレン様もこのような大任は初めてなのですから、そんなに気負われませぬ方がよいかと。私のように無駄に経験を積んでいるならまだしも……何せキルレン様は、帝国に行ったことさえないのですから」

キルレンは痛いところを突かれたという表情を浮かべた。

身分的には経験があつてもおかしくないのだが、キルレンは今までこういった国を代表するよう

な役目を担ったことがない。

本人は知らないことだが、ミレーナ王女を疎んでいたレモナス王により、王女に近い人物ということで冷遇されていたためだ。

「その点、私は何度もこういった経験を積み、帝国にも行き慣れていきます。どうか雑事は私に任せ、キルレン様はどつしりと構えていてください」

要するに、余計なことはするな、お飾りである。ただ何かあつた際には責任をとつてもらうがな——彼の言葉は、カイルにはそう聞こえた。

「……さすが、レモナス様に引き立てられて重用されていただけのことはありますな。下級役人からの立身出世は、ちよつとした語り草になつているくらいですし」

しかしこんなキルレンの切り返しに、オーギスは笑みを浮かべたまま、頬をピクリと引きつらせた。オーギスは亡くなったレモナス王の懐刀とも言われ、様々な汚れ仕事をこなして出世した、と噂されている。そんな陰口を叩かれているのは本人も百も承知だろうが、さすがにここまで正面きつて言われたことなど、今まででなかったのだろう。

オーギスのこうした内心を察知し、キルレンは一気に畳みかける。

「ただ、間もなくミレーナ様の治世となります。古き良き習慣を守りつつも、新しきを取り入れていかなければなりません。それを担う端くれとして、甘えさせてもらうばかりではなく、勉強する

つもりで積極的に取り組ませていただきます」

これからはお前の好きにはさせない。時代は変わるのだから古狸はとつと消え去れ、もう用済みだ——キルレンの言葉は、こう言っているかのようだった。

キルレンとオーギスはそれからしばらく無言だったが、同時に「はっはっは」と笑い合った。

表面上は笑顔の二人だが、その間の空気がギシリと軋んでいるかのようになり、カイルには感じられる。二人に合せて愛想笑いを浮かべたカイルだったが——

(何故俺はここにいなければいけないんだ)

そんな思いにとらわれていた。

「ところでカイル殿は……」

「はっはっは……うう！」

オーギスから話を振られそうになった瞬間、カイルは突如苦しそうに胸を押さえる。

「おや、どうされました？」

「失礼、例の魔族との戦いの傷がまだ完全に癒えておらず、時折痛みまして……うう！」

実際は傷などまったく負っていない胸を押さえながら、カイルはうめく。

オーギスは先王時代の権力の象徴みたいなものであり、対するキルレンは現在の最高権力者たるミレーナ王女の右腕とも言える存在だ。

ほんの少し付き合っただけだが、この二人が対立関係にあることはカイルにもよくわかった。このタイミングで会話に加わると、展開次第ではどちらかに派閥入りしたという言質をとられかねない。

功績を残して名声を高めつつあり、なおかつミレーナにも気に入られているカイルを味方に引き入れたいという思いは、間違いなく両者にあるはずだ。

だが自由な立場を優先したいカイルとしては、ジルグス王国全体に恩を売らなくともかく、特定の派閥に肩入れはできない。今回はあくまでミレーナ王女の要請で、ジルグス王国のために働くという形を取りたいのだ。

(巻き込まれる方はたまったものではない……)

この二人の対立は当然ミレーナ王女も把握しているはずだ。同行させたのはそれなりに考えがあつてのことなのだろうが、カイルは心の中で嘆く。

「おお、その様なお身体だというのにご協力いただきありがとうございます……そうだ、私の領地に良い温泉があります、負傷した軍の方も湯治に利用されるのですよ。よろしければ是非ともご招待したいのですが……」

「いやいや、我がキルレン家に使える神官を今も同行させておりますので、すぐに診させましょう。何なら洗礼をして聖騎士として……」

「……おや、何やら急に体調が良くなりました。ご心配をおかけしました。はっはっは」
早く目的地についてくれ、と心から願いながら、カイルはまた愛想笑いを続けるのだった。

セラン達は、カイルの乗っている馬車の少し後ろにつく、一回り小さな馬車に乗っていた。

こちらは前の馬車のギスギスとした雰囲気とは対照的にのんびりとして、お菓子を食べたりカードゲームをしたりと、いつも通りだった。

「馬車の旅は楽だがちよつと退屈だよな……」

カードを持つて大欠伸おおあくびをしながら、セランがこぼす。

「カイルはお偉いさん達と付き合いがあるって言ってたけど、あまり気乗りしなさそうだったわね」
リーゼも同じようにカードを持ちながら、仕方なしと言った感じで前の馬車に乗り込んだカイルを思い出す。

「……二人とも静かにしてくれ、集中できない」

負けが続いているウルザは、真剣な顔で持ち札を見ている。根が真面目な彼女はゲームに対して真剣である。それ故、手札の良し悪しあが顔に出やすく、負けやすい。

「俺は堅苦しい話は苦手だが、あいつの目標にはそういったお付き合いも必要だからな……はい、上がり」

「あたしも上がり、これでウルザは十連敗だね」

「くっ……も、もう一勝負だ！」

「まあ、偶たまにはこういったのんびりした旅もよかるう。五日ほどで終わるのが残念なくらいだ」

シルドニアがいつも通り菓子をかじりながら、のんびりと言った。

こんな調子で五日が経ち、何とかカイルの胃に穴が開く前に、一行は人族最大の都市、ガルガン帝国帝都ルオスに到着したのだった。

2

人族最大の都市、ガルガン帝国の帝都ルオス。現在の人口は約五十万と言われているが、正確なところはわかっていない。誰も把握しきれていないのだ。

三重の巨大な城壁に囲まれた城塞都市なのだが、その規模が並外れており、最外部の城壁が囲う面積は一都市でありながら小国にも匹敵する。更に整備された区画以外にスラム街も形成され、そちらも年々大きくなる一方だった。

そんな大都市を、カイルと仲間達の五人は、帝国が用意してくれた小型馬車で移動していた。

キルレン達は外交使節の国賓こくびんということで城門のチェックもフリーパスだが、参考人という立場のカイル達は別途手続きが必要となり、一時的に別れたのだ。

とはいえジルグス王国からの重要人物ということもあり、案内人と護衛に付き添われて軽く観光をしながら、手続きのために皇帝の住む宮殿まで向かう。

大通りには人が溢れ、人間だけでなくエルフやドワーフ、獣人はおろか、南方にしかない少数民族のリザードマンまでが普通に歩いている。

「前に行ったマラッドも人が多いと思っただけど、ここは桁けたが違うわね」

「どこからこんなに集まるんだか……」

ついこの間まで辺境に住む田舎者に過ぎなかったリーゼとセランは特に圧倒されているようで、ポカンと口を開けている。

「私もルオスは初めてだが……ここまで大きい都市だとは」

旅慣れているはずのウルザも珍しげに辺りを見回す。皆がそのように驚く中、シルドニアだけは大通りの両側に隙間なく並んでいる屋台の食べ物を見て、普段と同じ調子で目を輝かせていた。

「大陸で最大の都市であると同時に、最も混沌とした都市であるというのは本当だな」

心労で幾分頬がこけたように見えるカイルも、感心したように言う。前の人生でも来たことはあつ

たが、『大侵攻』の最中にあつては、このように余裕を持つて街を見ることができなかつたのだ。

だがそれを踏まえて考えても、今の様子は異常と言えた。道行く人々の活気や熱気というべきもののボルテージは常軌を逸したレベルにあり、それが都市全体を包んでいる。

「おそらく、五日後に開かれる建国祭の影響ではないかと」

カイル達の疑問を察したのか、案内人が説明する。

帝国建国祭。

三百年前の魔族との大戦が終わった前後に建国され、帝国の前身となったガルガン王国の建国を記念して行われる祭りで、三十年前に帝国となつてからも続けている。

年々帝国の領土が大きくなるにつれてこの祭りの規模も拡大し、あまりに大きくなりすぎたので、今では毎年ではなく二年に一回の開催となった。

「まさに世界最大の祭りです。お客様方は幸運ですよ、初めてのルオスで建国祭を楽しめるのですから」

案内人が、自分のことのように嬉しそうに言う。

その後も大広場や戦勝記念の凱旋門がいせんもん、大聖堂やオペリスクといった宗教建築などを紹介されながら進んでいく。どうやら、こういった国外からの客を案内するコースが決まっているらしい。案内人は各所の由来などを淀みなく語っている。



「しかし、おふくろから聞いていたが、ほんと大きな都市だな」

「そうだな……俺も話には聞いていたが」

カイルの母セラリアと、セランの義母レイラはこの都市出身で、二人は彼女達から時折話を聞いていた。特にレイラは過去このルオスの闘技場で剣闘士をしており、無敵の王者として有名だったという。

やがて、遠くに強大な円形状の建築物が見えてきた。大陸最大の闘技場と言われる、ルオス大闘技場だ。

現在も試合が行われているようで、まだかなり離れているにもかかわらず、地を揺さぶるような大歓声が聞こえてくる。

闘技場の前には人の数倍にもなるうかという大きな石像が数体並んでいるのだが、そのどれもがかつて栄華を誇った剣闘士達の像だ。

中でもひと際目立つ、女戦士の像があった。

「うげえ……」

それが目に入った瞬間、心の底から嫌そうな声を出したのはセラランだ。

「あれが、史上最強の剣姫として名高い『紅髪鬼』レイラの像です。無敵の王者としてこの闘技場に君臨していたのですが、人気絶頂だった十年前に突如引退し、それはそれは惜しまれたものです」

大剣を持って凛々しく立つレイラの像を眺め、昔を懐かしむように案内人が言う。

「建国祭に行われる大武術祭で、連覇を成し遂げたのは今まで彼女だけです。その戦いぶりは今でも語り草になっておりますよ」

どうやら案内人はレイラのファンだったようで、嬉しそうにこう語った。

だがカイルとセラン、リーゼにとつては、ただの身内の像にすぎない。

「……何が嫌って、異様に似ている点だな」

カイルもかつてしごかれた記憶が甦るのか、苦い顔で眺めている。

「確かにそっくりよね」

リーゼにとつてもレイラは親しい存在だ。この像が本人の特徴をよく捉えているのがわかり、感心とも呆れともとれる声を出す。

「ふむ、セランの養母でカイルと二人の剣の師匠だったか？ やはり強かったようじゃな」

「私がリマーゼに行った時は機会がなかったが、いずれ会ってみたいものだ」

シルドニアとウルザも興味深げに像を見ている。

「止めとけ、会ったって何もないことなんか無いぞ。しかし、こんなところでおふくろを見るとはな。いたずら書きでもしてやろうか？」

「そうだ、止めとけよ。それこそ何か不幸なことが起こりそうで嫌だ」

「……確かに、崇られそうだな」

セランとカイルが揃って、げんなりした様子でため息をつく。

二人にとつてはおっかない剣の師であり、幼い頃から刷り込まれた彼女への恐怖が消えることは、おそらく一生無いだろう。

案内人は何故か意気消沈したカイル達を見て首を傾げつつも、帝都中心部にそびえる宮殿へと一行を連れて行った。

ガルガン帝国の宮殿は、規模で言うならジルグスの王宮と同じくらいだ。

ただし華美な見た目にこだわったジルグス人のそれとは違い、万が一攻め込まれた際の防衛能力を第一に考えられた軍事的な意味合いが強い構造に、実用主義的な国柄が表れている。

カイル達を通された立派な応接室では、既にキルレン達が待っていた。もう少ししたら帝国側の代表が来るとのことだ。

ややあつて扉が開き、三人の人間が部屋に入ってきた。

まず最初に入室したのは、護衛らしき冷たい目をした男。一見優男に見えるが、通常の騎士達とは異なる鎧や剣で武装している。その姿を見た瞬間、セランが思わず「へえ」と小さな声を上げた。その男は油断なく室内を見渡していたが、セラン、そしてカイルの姿を認めると、はっきりと目

の輝きが変わった。直感的にお互いの強さを、それも超一流であろう強さを感じ取ったのだ。

男は微かに笑うと、そつと壁際に寄って静かに控えた。

その次に入ってきた人物に、全員の注目が集まる。

三十代半ば、がっしりとした体格で長身の男。その身のこなしから、武芸の心得があることは明らかだった。

そして何より特徴的なのは鋭い目つきであり、目に映る全てを見透かして圧倒するかのような眼力を放っている。ジルグスのミレーナ王女とはまた違った意味で、人の上に立つに相応しき風格のある人物だ。

「これはエルドランド殿下、お久しぶりに御座います」

オーギスが立ち上がり、その男に頭を深々と下げる。

エルドランド・オバ・ガルガン。最近体調がすぐれないと噂される皇帝ベネディクスに代わり、帝国の内外を取り仕切っている第一皇子だ。

更にその後ろから続くのは、小柄な老婆。かなりの高齢と見え、腰は直角になるのではないかというぐらいに曲がっているが、自分の背よりも大きな杖をついてしっかりと足取りで歩き、その顔には温和そうな笑みが浮かんでいる。

どこにでもいそうな老婆だが、彼女こそ現在人族の中で確認されている限り三人しかいない特級

魔法の使い手、ガルガン帝国宮廷魔導士第一位の『偉大なる』ベアドーラだ。間違いなく歴史に名を残すと目されている人物である。

皇帝を除けば、エルドランドとベアドーラの二人こそがガルガン帝国における最重要人物なのは間違いない。帝国側もそれだけこの会談を重視しているのだということが、カイルにもよくわかった。

三人の後に帝国重臣と思しき者達も入ってくるが、明らかにエルドランドのついでにすぎない。

「ジルグス王国からの使節の方々、よくぞ参られた。本来なら父上がこの場に出るべきだろうが、少々都合が悪いため、代わりに私が相手をしよう」

エルドランドの淡々とした口調。歓迎しているかのような口ぶりだが、表情は一切崩していない。

「さて、それでは始めようか」



「まず今回の帝国の被害について、ジルグスがどのような形で謝罪、そして補償をいただけるのかをお聞きしたい」

切り出したのはエルドランド。

はなから、事件の責任は全てジルグスにあるという態度だった。

「謝罪と補償、それは妙な話ですな。これは魔族の仕業だというのは事前に報告した通りで、ジルグスもいわば被害者であると、お知らせしているはずですよ」

キルレンが毅然とした態度で応じる。

ジルグス王国の方針としては、下手に虚偽を混ぜた報告をして難癖をつけられてはたまらない、事実をありのままに伝え、全て魔族のせいだと責任を回避し、むしろ自分達も被害者だとするつもりだった。

「それを黙って信じろと言うのは、いくらなんでも無茶な話だ。それがまかり通るなら、全て魔族のせいで済んでしまう。何よりその魔族というのが非常に眉唾もので、到底信じられん」

「さよう。そもそも魔族が人族領内にてそのように活動をしたことなど、ここ三百年はありません」
ベアドーラがエルドランドに追隨する。

魔族自体は確実に存在する人族共通の脅威だが、現在その脅威に直接触れたものは皆無に近い。一般人にとっては、ほとんどおとぎ話と同様になっている。

「それを証明するための証人を用意しております。今回の魔族と戦い、討ち取った者です」
キルレンの紹介に早速出番か、と思いつつカイルが前が出る。

「報告にあったのはお前のことか？」

エルドランドの射すくめるような視線が、カイルを貫く。精神薄弱の者ならそれだけで震えて何もできなくなりそうどころだが、カイルは平然としていた。

「はい、カイル・レナードと申します。正確には魔族は二人おり、一人を討ち取り、もう一人には逃亡されました」

更に言うなら、逃げられたというより逃がしたのだが、そこまで正直に言う必要はない。

「……口では何とでも言える。お前はジルグスの直接の家臣ではないようだが国民であることには変わらず、信用はできない。魔族が確かにいたという明確な証拠でもなければな」

「そう思われるのは当然でしょう。実際に魔族がいて、それを倒した証が、これになります」
カイルが取り出したのは、角。戦いの中でカイルが斬り落とした、魔族ガニアスの羊角だ。

それを見た瞬間、糸のように細められていたベアドーラの目がはつきりと開く。角にまとわりつく、人族とは違う異様な魔力の残り香を感じ取ったのだ。

ベアドーラは震える手でカイルから角を受け取り、しげしげと観察した後で深くため息をつく。

「これは間違いなく強力な力を持った魔族の、それも長く保存されていたような遺物ではなく、最近斬り落とされた角に間違いありません。このような物が現在の人族領に存在するとは信じ難いですが、こうしてある以上……」

認めざるを得ない、そんな口ぶりだった。

帝国陣営に沈黙が訪れる。ベアドローラが認めた以上、帝国そのものが魔族の存在を認めたことになるのだ。

「……なるほど、これが魔族の物だということはわかった。しかし魔族が本当に現れたとしても、それが本当にこの大使館での殺戮（ころ）に関与しているかどうかはわからないのでは？」

「では少々考え方を変えていただけませんか？ 帝国の大使館の人員の半数とワイバーンを含めた飛竜騎士団、更には宮廷魔導士第二位のアルザード殿をほぼ一瞬で討ち取る……これが魔族以外にできるとお思いですか？」

「む……」

こう言われては、エルドランドも押し黙るしかない。

カイルの言う通り、大使館の生き残りの証言からも、襲撃は少人数によるもので、しかも短時間で行われたとわかっている。そして自国の戦力に自信を持つ帝国からすれば、そんな相手がそう言ういてはたまらない。

「ふむ……だがそうになると、お前達はそれだけのことをした強力な魔族よりも強い、そういうことになるが？」

「はい、その通りです。自分達は帝国の騎士団や宮廷魔導士を倒した魔族、それよりも強いです」
皮肉げなエルドランドに、カイルはためらうことなく断言した。

そんなカイルを見て、エルドランドはさすがに少し呆れた顔で笑う。

「なるほど、大した自信だ……だが全てを魔族が単独で行った訳ではないのはわかっている。たとえば同時に起こった市民の大量誘拐事件については、命令を出したのはカランの都市長だということはないか。そしてカランは現在ジルグスの支配下にある。そのことについてはどうか？」

このエルドランドの問いに、出番だと言わんばかりにオーギスが出てくる。

「その件に関してですが、命令に従っていた実行犯を捕らえ、詳細を聞き出しております。どうやらバックス都市長は、魔族に半ば無理やり協力させられていたのだと見られます」

こんなオーギスの説明に、事前の打ち合わせと違う、とキルレンが腰を浮かしかけたが、オーギスが鋭い目でキルレンを黙らせる。

こればかりは長年の経験の差としか言いようのない、圧倒的な迫力だった。

「それはあまりにもジルグスに都合の良い解釈ではないか？ その都市長が己の目的のために魔族を引き入れたのかもしれないではないか」

「いえ、その実行犯の話聞く限り、そうとしか判断できませんもので。捕らえた者達の証言もそれなりに信用できるかと……何せガルガン帝国の元工作兵なのですから」

ポロリ、とまるで何でもないことのように付け加えるオーギス。

工作兵、と聞いた瞬間、ざわりと帝国陣営に動揺が走った。

「……事前の報告には、そのような記載は無かったと思うが」
エルドランドが睨み付けるような目で、オーギスを見る。

「おや、そうでしたか？ ならばそれはこちらの記載ミスでしょうな。大変失礼いたしました」
オーギスはしれっと、頭を下げて謝罪する。もちろん、事前に対策をされないよう、わざとやったことだ。

「ただ、そちらのお手を煩わせないよう既に裏取りはしておりまして、間違いないとのこと。あ、これがその詳細です」

こう付け加えたオーギスが、捕らえた元工作兵の名前や所属していた部隊、似顔絵などが明記されている紙を示す。

すぐに控えていた文官が確認のために室外に出ていったが、エルドランドはオーギスの態度から、これは事実であろうと確信していた。

帝国軍の規律は厳しく、それが強さの秘密の一つにもなっているのだが、その分耐えきれずに脱走する兵も多い。脱走兵は死刑なのだが、それでも跡を絶たないという、帝国の悩みの種だ。

特にこの工作兵というのは厄介で、表沙汰になつては困る特殊な任務を請け負っている場合が多く、危険な情報を持っている可能性がある。

「こちらとしましても、ガルガン帝国は信頼を深めていくべき大切な相手、もしご希望があまりま

たら引き渡してもよいのですが……まあその際は、改めて話し合いが必要になるでしょうが」

何なら見逃してやってもいいが、もちろんそれ相応の代償はいただきますと暗に言っているのだ。

そんなオーギスを憎々しげに見る帝国陣営。

オーギスのこういった根回しはさすがだった。これを己の手柄にするため、キルレンにも黙っていたのだろう。キルレンも責めるような視線を向けているが、オーギスは涼しい顔のままだった。

この後も話し合いは続いたが、結局平行線のままであった。

ジルグス王国としては、魔族が全ての原因で、自国の責任は一切ないとの立場を崩さない。

ガルガン帝国はジルグスの責任を追及したいのだが、魔族がいた証拠と帝国の元工作兵が関わっていたという事実があつては、そももいかない。

しかし現実には被害が出ている以上、食い下がる必要もあつた。

捏造した証拠で言いがかりをつけて賠償を求めたり、または開戦の口実にするという手もあるが、

今回の件は帝国にとつても突発的な事態で、準備が整っていない。

今日のところは一旦終了して続きは明日——という雰囲気になり始めた頃、音を立てて無遠慮にドアが開かれた。室内にいた全員が一斉にそちらを見る。

国家間の重大会議に乱入してきたのは、派手な服をだらしなく着た、明らかにこの場に不似合い

な若い男。

その男を見て帝国陣営の半数が怒りの混ざった苦い顔になり、残る半数は呆れたように苦笑している。

「よう、ちよいと邪魔するぜ、兄貴」

若い男は不敵な笑みを浮かべたまま、軽い調子でエルドランドに声をかけた。

「マイザーか、何の用だ」

闖入者ちんぱうしやの名は、マイザー・レング・ガルガン。ガルガン帝国第三皇子にして、ミレーナ王女の元婚約者だった男だ。

3

「いやジルグスからの使者が来てるって聞いてよ……お、あんたが俺の元婚約者の従姉さん？へえ」

マイザーから無遠慮に、頭から爪先つばさきまで舐めまわすように見られて、キルレンが顔をしかめる。

「あんたを見る限り『ジルグスの至宝』って言われていたお姫さんも、噂通り相当綺麗なんだろう

ね。婚約破棄はちよいと惜しかったかな、こりゃ」

ニヤニヤと品の無い笑みを浮かべるマイザー。

「止めんかマイザー、失礼だぞ」

エルドランドがきつい口調でたしなめるが、マイザーはまるで堪えない。

「だってよ、俺は結婚する気満々だったんだぜ。どうせなら美人の方がいいに決まってるだろ。そうだ、何なら代わりにあんたでもいいけど？ お互いの国の友好のためにさ、どうかな女騎士さん？」

あいつも変わらずにやけた顔、軽い口調。

対するキルレンは明らかに不快そうで、怒りも混じったのか、伶俐れいりな顔に赤みが差している。相手が帝国の皇族でなければ、この場で剣に手をかけていたかもしれないくらいに形相だった。

「……せっかくのお申し出ですが、私には婚約者がいますので」

怒りを抑え、キルレンは何とかそう返答する。

「おや、残念。まあフラれたら声をかけてくれ、あんたならいつでも歓迎するから」

軽く肩をすくめたマイザーは、続いてカイルに向き直る。

「それでお前が、たしかカイルって奴か？ 魔族を倒したっていう」

「そうです、マイザー殿下」

カイルは礼儀正しく対応する。

「魔族つてのはどんな奴らで、どうやって倒したんだ？ 面白そうだし、是非詳しく聞きたいんだが」

「あまり面白い話にはならないと思います。勝てたのは運が良かったということもありますので」

「……魔族が伝承通りなら、運だけで倒せるってものでもないだろ？」

問いかけるマイザーが少しだけ覗かせた鋭い目の光、それを見逃さなかったカイルは妙に嬉しくなった。

(本質はそのままだな……当然か)

「はい、もちろん私には魔族を倒すだけの实力があります。おそらく人族全体の中でも相当の強さだと自負しております」

内心を一切出さず真顔で言い切るカイルに、さすがに目を丸くしたマイザーだが、次の瞬間には腹を抱えて大笑いした。

「な、なるほどねえ。そこまで言い切るとは大したものだ。それで……」

「マイザー、そこまでしておけ……ジルグスの方々、失礼した。弟の非礼は代わりに詫びよう。今宵はささやかながら饗宴きやうえんを用意したので、楽しんでほしい」

今日はここまでとばかりに、エルドランドは強引に話を終わらせた。

用意された部屋へと案内される途中で、怒り心頭とばかりにキルレンは語気を荒あらげる。

「聞きしに勝るうつけぶりだな、あんなのが第三皇子とは……帝国は何を考えている！」

帝国宮殿内ということの小声ではあるが、抑えきれない興奮がにじみ出ている。

「帝国としても持て余しているようです。ただベネディクス陛下やエルドランド殿下も、お身内には甘いようで……」

オーギスもため息混じりに言う。ガルガン帝国との外交を請け負ってきた彼には、色々と苦しい思ひ出があるようだ。

「……だがあのような男がミレーナ様の王配とならずに済んだのは、幸運だった」

もしかしたら、将来膝を折らねばならない相手だったかと思うとゾツとする、とキルレン。

「ははは、それは確かに。ジルグスにとっては不幸中の幸いでした」

苦笑しつつオーギスが同意する。立場を巡って対立している二人ではあるが、どちらもジルグスに対する忠誠心は本物なので、厄介ごとが避けられたのは共通して嬉しいのだろう。

(そうかな？ 案外良い夫婦……というかお似合いの夫婦になったんじゃないかと思うけどな)

二人の会話を聞き、ミレーナ、そしてマイザーをよく知るカイルは、内心そんな感想を漏らす。

「何か機嫌良くない？」

傍らからカイルの顔を覗き込むように、リーゼが話しかける。

「そう見えるか？」

「うん、カイルは機嫌がいい時、左頬が微妙に痙攣けいれんするんだけど、今も動いてる」

「……知らなかった」

自覚していなかった癖を指摘され、思わず頬を触るカイル。

「それにしてもカイル。人族でも最強とは、中々吹くではないか」

シルドニアが先ほどの会話を思い出し、からかうように言う。

「そこまで言った覚えはないが……まあ、あいつにはああいうはっきりとした受け答えの方が、印象が良い……良さそうだったからな」

前世のマイザーを思い出して、カイルは小さく笑った。

カイル達が退室した後、エルドランドはマイザーとベアドーラ、そして壁際に控えていた鎧の男以外を下がらせていた。

「兄貴。あのカイルって奴、今のうちに取り込むか、それが無理なら殺しておいた方がいいぜ」

マイザーがエルドランドに話しかける。口調は先ほどまでと変わらないが、目つきが違う。

「……根拠は何だ？」

「魔族を倒したのは間違いないと思う。頭も切れるようだし、なのにまだジルグスの直臣じゃない

なんて、何かあるに決まってる……後は俺の勘だ」

「勘か……お前の勘はよく当たるからな」

厄介なことには特にな、とエルドランドはため息をつく。

「人族でも有数の強さつてもホラじゃなさそうだ。それに一緒にいた仲間もひと癖ありそうだったし……ダリウス、お前から見てどうだ？」

マイザーが壁際に控えていた男に聞く。

「はい、人間とエルフの女も中々腕が立つようでしたが、特にあの剣士……あれは相当な腕でしょうな」

ダリウスはセランを思い浮かべながら答える。

「お前がそこまで言うとはな……で、戦ったら勝てるか？」

「さて、そればかりは実際に戦ってみせんと」

軽く笑って言うダリウス。

「大抵の相手なら、勝てると言い切るお前が……」

ダリウスは、エルドランドがその剣の腕を見込んで側近として仕えさせている男だ。帝国でも随一の腕を持つ剣士の言葉に、エルドランドは顔をしかめる。

「儂が気になったのは、白い服の少女じゃな。あれは普通の人間ではない。さりどて、通常の魔法

生命とも、ちと違うようじゃった」

ベアドーラがシルドニアのことを思い出す。

「正体は僕にもわからない」

「ベア婆さんがわからないんじゃ、誰にもわからないだろ」

マイザーは軽く笑うが、エルドランドは少し慌てていた。ガルガン帝国の知の象徴とも言うべきベアドーラが「わからない」と言ったことなど、これまで記憶に無いからだ。

「……とにかく油断ならない連中だというのは間違いないな、詳しく調べる必要がある。既に密偵には身元調査を命じているので、すぐに結果が出るだろう」

ベアドーラとダリウス、それぞれ知と武で信頼している兩名の判断に、エルドランドは警戒を深めた。

「急いだが良いぜ、あれは有能すぎるタイプだ。味方にできないなら、いない方が良い」

「お前がそこまで断言するとは珍しいな」

「言ったら、勘だつて。何か妙に気になってな……」

そう言つて頭を掻くマイザーは、どうやら己の得た感触を自分でも上手く説明できないようだ。

エルドランドはこの弟を、高く評価している。多くの者に疎まれているが、能力は全てにおいて高く、奇行はその本性を隠す擬態にすぎないと確信を持っていた。

そして何より、血の繋がった弟として信頼している。

「まったく……父上のこともあるし、あいつの問題でも頭痛いのに、厄介ごとがもう一つ増えた」
現在起こっている様々な問題を思い浮かべ、エルドランドは帝国の未来を憂う。

「それにしても、お前をジルグスに送り込めなかったのはつくづく残念でならんよ。そうなれば勞せずジルグスを手に入れられたも同然だったというのに」

「そう上手くいく訳ないだろう。調べた通りなら、あつちのお姫さんもひと癖ありそうだったしな。それにだ……仮に俺がジルグスに潜り込んでいたとしても、勝ち目があると踏んだら、そのお姫さんと手に手をとつて、ガルガンに攻め込んだかもしれないぜ」

マイザーがニヤリと笑うと、エルドランドも楽しげに笑みを浮かべる。

「ま、こうなったら俺の役目は、精々悪名を高めて帝国への不満を一身に被ることだな。ついでにいろんな罪もなすり付けた上で、兄貴は帝国のために、涙ながらに実の弟を処刑して評判を上げてくれ。それが放蕩皇子のいい使い道たる？」

「お主が素直に処刑される筈もなからう。顔と名前を変えて、晴れて自由の身になるおつもりじゃろうに」

マイザーの物言いに、ベアドーラが笑って横槍を入れ、エルドランドはまたため息をついた。
「お前をそんな勿体ないやり方で使うはずがないだろ。今良い方法を考えている最中だ、覚悟して

おけ。それにしても魔族か……三百年も大人しくしてくれたのだから、もう百年くらいはそのまま
で大人しくしていればいいものを」

先ほどは実在を疑うようなことを言っていたが、状況からしてジルグスの言い分に間違いはない
と、始めからわかっていたのだ。

これを機に魔族の活動が活発化するようなことになれば、帝国としても国策を大きく変えていか
ねばならない。

「まあ問題ないだろ。たとえ親父に何かあってもエルの兄貴が生きている限り、ガルガン帝国は安
泰だ」

「縁起でもないことを言うな。それにその言い方では、私に何かあったら帝国は終わりではないか」
「なら精々長生きしてくれ、その方が俺も楽ができるしな」

「お前に言われるまでもない」
明るく、長男と三男は笑い合った。



——その頃。

「……で、あの第一皇子が亡くなるという訳か？」

「ああ、それも皇帝が亡くなる少し前にな」

案内された部屋でシルドニアと二人つきりになると、カイルはこれから帝国に起こる混乱をシル
ドニアに語り始めた。

4

カイルの前世において、今から約一年後、皇帝ベネディクスは高齢からくる病で余命いくばくも
ないと診断される。しかし跡継ぎである第一皇子エルドランドは史上稀に見る名君になると見込ま
れるほど優秀で、帝国の未来は安泰と思われていた。

だがそのエルドランドが急死し、帝国は一気に混乱の極致に陥ることになる。

そして死の床にあった皇帝ベネディクスが後継者に命じるのは、エルドランドの遺児でも第二皇
子でもなく、第三皇子のマイザーだった。

このため帝国は、皇帝の遺言に従いマイザーを支持する者、幼いエルドランドの遺児を擁立し
ようとする者、更には自らが正当な後継者だとして名乗りを上げる第二皇子に付く者の三つに割れ、

内乱状態に。

当初この内乱は数年、あるいは十年以上続くかと思われたが、マイザーはそれまでの評判とは打って変わった驚異的な手腕で帝国をまとめ上げ、一年で国内から反対勢力を一掃する。

その実力を誰もが認めるに至り、マイザーは新皇帝に即位。帝国が新たなスタートを切ろうとしたまさにその時——あの『大侵攻』が始まった。

「あの内乱がなければ、人族ももう少しマシだったかもしれないな」
カイルが苦い口調で言う。

人族最大の勢力だったガルガン帝国は内乱で疲弊^{ひへい}していたために初動が遅れ、それが帝国の、ひいては人族が滅亡寸前まで追い込まれる遠因ともなったのだ。

「なるほどのう……それで、第一皇子は何で死んだんじゃ？」

話を聞いていたシルドニアがごく当然の疑問を懐^{いだ}く。

「いや、それが俺にもわからないんだ。マイザー本人にも聞いたんだがな」

エルドランドの死因は、公式の発表では心臓発作とされた。だが前日まで病のそぶりも見せなかった第一皇子の突然の死は、多くの憶測を呼んだ。最も有力だったのは、皇帝の座を狙ったマイザーによる暗殺であったという説だ。しかし、これはあり得ないとカイルは確信している。

「元々皇帝になるつもりなんて無かったようだったし……案外、本当に自然死だったのかもしれない

い。必ずしも物事に裏がある訳じゃないからな」

真実なんてそんなもんだろ、とカイル。

「まあ得てしてそんなものかもしれないが……とはいえ可能性は捨てきれまい。ほれ、ミレーナの件も裏はないと言っていたではないか」

カイルも、前世でミレーナ女王が死んだ事件は、ただの事故だと思っていた。

だが蓋を開けてみれば、実際は彼女の兄であるカレナス王子が計画した王位目的の暗殺事件で、更にその裏にはレモナス王の謀略もあった。

「それを言われると否定はできないが……だが、俺はこの件に介入するつもりはない」

たとえその死の真実が何であれ、事前に忠告なり対処すれば、助けることができるかもしれない。だがミレーナの時と違い、その行動が自分の目的である人族の英雄になること、そして『大侵攻』に備えることにはつながらないと、カイルは見ていた。そしてカイルが関わらなければ、おそらくエルドランドの死は変わらないだろう。

「エルドランドには悪いが、そのまま退場してもらおうつもりだ。次の皇帝はマイザーの方が、俺にとっては色々都合が良いからな……」

マイザーとの出会いは、あの地獄のような日々の中では数少ない、良い出来事だった。数多く出会った各国の指導者の中で唯一尊敬に値し、好意を持たれた相手である。その能力も含め、絶対に味

方に引き入れたい人物だった。

そのためには是が非でも、帝国の皇帝になってもらわなければならない。

「お主がその方が良いと判断したのなら、何も言わぬがな。だが味方にしたいと言うのであればその内乱の際に力を貸すか、事前に何か恩でも売っておいた方がいいのでは？」

「確かにそうだな……」

シルドニアの提案に、カイルは腕を組んで考え込む。

マイザーは内乱を短期で鎮めるためにかなり強引な手法をとり、それ故に国力が低下した。これほどできるだけ避けたかった。

（マイザーにはある程度事情を話しておいた方がいいかもしれないが……なんて話す？ もうすぐエルドランドが死んで内乱になるからそれに備えておいてくれ……と言うのは、怪しすぎるな）

仮に信じたとしても、その時は何としてでも兄を死なせぬように動くだろう。

であるならば、やはり内乱の際に力を貸して、早急に国を治める方向で進めるべきだ。

事が起こるのは一年後とはいえ、今のうちに手を打っておいた方がいい。

「とりあえず、今夜の晩餐会で機会を見つけて、積極的に話しかけにいくさ」
まずは顔つなぎだ、とカイルは心を決めた。

その夜、ジルグス王国からの国賓を歓迎するため、宮殿にて立食形式の晩餐会が開かれた。参加者の多くが帝国の貴族で、他にもルオスに滞在する外国の要人などが招待されている。

はじめにエルドランドからの挨拶があり、続いて主賓であるキルレンやオーギスが紹介された後は、自由な歓談の場となった。

「こういうのって二度目だけど、今回は気が楽だね」

貸し出されたドレスを身に着け、明るくこう言うのはリーゼだ。

「あの時はどうも落ち着かなかったからな」

同じように着飾ったウルザも、軽く安堵のため息をつく。

「そいつは何よりだ」

カイルが苦笑しながらリーゼとウルザを見た。

二人が言っているのは、ミレーナ王女を救った件で勲章を授与された際の晩餐会のことだ。規模は今回と変わらないが、そういった行事に出るのが初めてというだけでなく、勲章授与されたカイル達が主役と言うべきものだったので、その一挙手一投足が注目されていた。緊張して楽しむどころではなかったというのが、全員の偽らざる本音だ。

だが今回の主役はキルレンであり、カイル達はオマケのようなものなので、それほど注目も集まらない。

本来こういった晩餐会は食事の場というより、上流階級の社交の場、外交の場であって、一種の緊張感に包まれているのが普通だ。だが最近になって台頭してきた歴史の浅いガルガン帝国の晩餐会はそこまで格式ばったところがなく、全体的に砕けた雰囲気だった。

そして領土が広く、実力主義の国なので国民の種族が多様である。そのためエルフやドワーフだけでなく少数民族である獣人もいて、ウルザも溶け込んでいる。

そうした理由からも、二人とも今日は余裕を持って晩餐会を楽しんでいた。

もともとシルドニアとセランは、そんなことなどまるで気にせず、思う存分食事をとっているが、「あたしも何か食べてくるね。こういうところの料理って興味あったんだ」

前は緊張で味がよくわからなかったと、自分でも料理をするリーゼはテーブルに並んでいる豪華な料理の数々を見にいづく。

「私も少し見て回ってくる」

元々好奇心の強いウルザも、色々と気になるものがあるのだろう。リーゼの後を追う。

一人になったカイルは周りを見回し、マイザーを探す。

晩餐会の行われている大広間の中心には、主賓のキルレンがいた。真っ白なドレスを纏っており、武芸をたしなむ彼女の凛とした魅力がよく引き出されている。『ジルグスの至宝』と名高いミレーナ王女の従姉に相応しい美しさは人目を引き、多くの若い男性に囲まれていた。上級貴族としてこ

ういった場に慣れているキルレンは、実にあたりさわりなく対応している。

またそのすぐ側では、オーギスが帝国関係者と何やら低い声で内密の話をしているようだ。

他も見て回ったがマイザーの姿は見当たらず、さてどうしたものかとカイルが考えていると、背後から声がかかる。

「カイルというのはお前か」

その低い声に振り向くと、痩せた背の高い男がカイルを見下ろすようにして立っていた。

見覚えのない顔だったが、その立派な身なりには、ガルガン帝国皇家の象徴である、黄金の蛇の紋章がついている。

第一皇子と第三皇子を見知っているカイルは、必然的に男の正体に辿り着いた。

「はいそうです。何かご用でしょうか、コンラート殿下」

カイルはガルガン帝国第二皇子に、軽く頭を下げた。

5

「ふん、さすがに私のことは知っているか。ジルグスの者にしてはまあ、感心だな」